

府県の枠を超えて連携し 「学校力」を高め合う

「4校進路指導情報交換連絡会」

近畿地区の公立高校の進路指導部長が集まり、
2009年に「4校進路指導情報交換連絡会」が発足した。

参加校は、滋賀県立膳所高校、京都市立堀川高校、奈良県立奈良高校、兵庫県立姫路西高校。
10年2月に行われた3回目の会合では、初めて4校の校長もこの会議に出席し、
進路指導部長の議論の場に同席すると共に、校長同士の意見交換も行った。

進路指導部長の会合に 4校の校長が初めて同席

「4校進路指導情報交換連絡会」は、進路指導に関するさまざまな会合で、滋賀県立膳所高校、京都市立堀川高校、奈良県立奈良高校、兵庫県立姫路西高校4校の進路指導部長が顔を合わせるうちに、「公立高校として新しい教育の理念を具現化する学校づくりを目指して、情報を交換し、共に協力していきたい」という思いで、2009年2月に始まった。

1回目は膳所高校で行い、会場を各校で持ち回りにし、年に2回開催することなど運営についても話し合った。2回目は堀川高校を会場に、授業見学を行った。2回の連絡会を通して、各校の課題や取り組みの内容などを共有すると共に、進路指導の進め方について熱い議論を交わした。

3回目の今回は姫路西高校で開催し、初めて4校の校長すべてがこの会議に同席した。それぞれの校長が他校の進路指導部長の語る課題や取り組みを聞くことで、各

校の教育内容の改善や制度面での課題解決に向けてのヒントを得られるのではないかと考えたからである。

連絡会は、まず進路指導部長が自校の課題を報告し、質疑応答が行われた。「教育理念や指導法の継承の難しさ」「授業力の向上」「学年団や教科間の連携の必要性」などが、主なテーマとして話し合われた。

そのあと、今回4校の校長が初めて顔を合わせたこともあり、それぞれの校長の教育に対する思いや学校経営についての考え方、またそれを実現するための手立てなどについて話し合った。次ページから、その内容を紹介する。

図 参加校の位置



連携を通して思いや取り組みを 吸収し合い、「学校力」を高めたい

各校が考えている
教育の在り方について

河原 教育の改善は、つまるところ授業改善にあると考えますが、その前に高校教育として、「人として生きるということが何か」を生徒たちに伝えることが重要だと考えます。人生を生きるということの充実感を味わうこと、つまり自己実現と人間形成にどうかかわるかです。自己実現は「なりたい自分になる」こと、人間形成は「大きな人間になる」とことです。そのためには生徒にどのような力を身に付けさせればよいのか。私は二つあると考えています。一つは「問題解決能力」、二つには「共通できる力」です。自分で問題解決をし、しっかりと意見にして発信すると共に、誰とでも共同して仕事ができることが、これからの時代には大切になると考えます。つまり、

主体性と社会性の両方を持った人を育てるということです。

それ以外にもう一つ、感性つまり「心」を育てることです。高齢化が進む中、介護や看護がますます重要な時代になってきます。そのような中では、相手の表情を読み取り、相手を思う丁寧な言葉掛けと、しっかりとしたコミュニケーションが図れる専門性が大切だと考えます。教師もまた生徒の表情や心を読み取り、生徒とのやり取りを大切にしながら人と人とのつながりを育てる教育を目指さなければならぬと考えます。

荒瀬 高校教育において大切なものは、「知らないものに対する関心」や「発信された情報や言葉を受けとめようと努力する心」だと思えます。入学時にはそうした力を持つ生徒ばかりではありませんから、本校では「問題を発見する力の重要性」を繰り返し伝えていきます。気付きを



滋賀県立膳所高校校長
河原 恵
Kawahara Satoshi



京都市立堀川高校校長
荒瀬克己
Arase Katsumi

課題に設定し、解決に向けて段取りを組む。この過程こそが、豊かな「心」を育てると考えます。

ここで重要なのは、コミュニケーション力です。課題や段取りを他者に伝えるための言語力と、他人と一緒に物事を進めるコミットメント（かわり合い）力が必要になります。



奈良県立奈良高校校長
辻寛司
Tsuji Hiroshi



兵庫県立姫路西高校校長
中杉隆夫
Nakasugi Takao

す。この力を育てる場として、授業があると考えます。教師とのやり取りはもちろん、例えば、東京大や京都大のようなメッセージ性のある入試問題を解くこと自体、相手から情報を受け取り自分で考える訓練になるのです。

このような取り組みを通して、「自

*プロフィールは取材時(2010年2月)のものです

立する18歳」を育てることが学校の最高目標です。自分で生きる力を育むということです。10年後に彼らが親になった時、その次の世代すなわち彼らの子どもの世代を育てる人間を育てるといふ自覚を持って、教師は生徒の指導に当たらなければならぬと考えています。

辻 私はコミュニケーションの基本は「挨拶」だと考えています。「心を開いて相手に迫る」、これが『挨拶』の語義です。生徒には、折に触れ積極的な挨拶を呼び掛けています。私の前任校は進路多様校で、心を裸にして生徒とぶつかり合うと、教師と生徒というそれぞれの立場を超えた人間関係が築けるような学校でした。その学校の生徒からは、「しっかりとかに生きる力」を感じました。現任校の生徒は、勉強にも学校行事にも、そして部活動にも一生懸命に取り組めます。しかし、「社会をしたたかに生きていけるのか」と問われれば、疑問に感じます。

ある調査を見ると、志望校選びの際に「興味のある学問分野」で選んだ学生は約65%いましたが、同時に入試難易度や自宅通学圏内という理

由で選んだ割合も高いというデータがありました。志望校という将来を決める重要事項を安易に選ぶ生徒が、厳しい社会を生き抜いていけるのかと疑問を抱かずにはいられません。本校の生徒には、きちんとした挨拶と良い意味でのしたたかさを身に付けさせたいと考えています。

中杉 私は「心や命の大切さ」を前提にし、そこから教育を考えるべきだと思っています。そのことを踏まえ、校長自身が自分の言葉で学校の進むべき方向をきちんと職員に示すことが大切だと考えます。教育の場で生徒と直接向き合うのは先生方です。学校目標を共有し、職員のモチベーションが高まるよう支援していくのが、我々校長の仕事だと思うのです。

私は、教師にとって最も重要なのは授業力だと考えています。そのためには、「専門性」に加えて人間力の向上が絶対条件です。単に教科書の知識を教えるというのではなく、生徒の知的好奇心を駆り立てるような授業であり、その言葉に耳を傾けたくなるような人間的な魅力であり、生徒一人ひとりに向き合い生き

方を語る姿勢も含まれるでしょう。それらすべてがあつてこそ、生徒は教師を信頼するのではないでしょう。そして、生徒の信頼を得られれば、保護者の満足度も高まり、地域の評価にもつながると思います。

各校が目指す教育を進めるには どのような手立てが必要か

中杉 姫路西高校では、昨年度の1年間をかけて、教頭と私とで先生方の授業を見て回りました。独自の「授業観察シート」を作り、授業の展開や板書の仕方などの細目評価と授業の総合評価に加え、一人ひとりの先生方の授業力向上にむけたポイントを書き込み、その日のうちにフィードバックするよう心がけました。次第に先生方の方から感想を聞きに来るようになり、授業の改善だけでなく教師の意識向上にも効果があったように思います。

授業観察のきっかけは、学校評価に関する調査の「分かる授業」の質問で、生徒と教師間で評価が食い違っていたからでした。熱心な先生が多いのになぜかと考えた結果、「分かる授業」を組織化することが学校

全体の力を高めると思ったのです。

荒瀬 私学や国立大付属の学校の中には、会議もなく、指導の仕方も統一されていないが結果を出している学校があると聞いています。一人ひとりの教員の持っている力が大きいからであると思います。しかし私たち公立高校は必ずしもそうはいきません。そこで私は職員会議で「私も含め、我々一人ひとりの力はちっぽけなものだから、チームワークが重要だ」とよく話します。個々の教師だけで何がができるわけではなく、皆が力を合わせてこそ、更に大きな成果が生まれるからです。ですから、例えば、授業評価では「良かった点は必ず良かったと言いました。改善すべき点は次に生かせるようにはつきり伝えましょう」と話しています。授業評価はあくまでも仕事の評価であり、その人の人格を評価するものではないからです。

堀川高校の最高目標は「自立する18歳を育てる」ことです。目標達成のために、授業や生徒会、学校行事などをどのように連携させていくかを検証しながら授業力を高めていくと考えています。この役割を担う

校務分掌として「研究開発部」を設けました。ただ、教師には一人ひとり自分なりの教育観があり、更に人事異動という制度的な壁もあって、教師同士をつなぐためには、さまざまな工夫や取り組みが必要です。

辻 公立校が避けて通れない人事異動による課題を少しでも解消しようと、奈良高校では二つの取り組みをしています。

一つは、教師の学校運営への参画意識を高める取り組みです。私は本校に赴任してすぐ、「SMA P (School Management Appraisal Plan)」というシステムをつくりました。「学校経営評価・計画」という意味で、学校教育活動全般について、目標と具体的方策を校長に提示させ、取り組みと成果を年度末に自己評価させます。また、担当の校務分掌や教科等の活動については、「自己申告シート」で目標から自己評価までを進行管理することにより、自分が取り組みたいことをどんどん提案し、実践できるようにしました。管理職だけでなく、教師が皆、学校経営への参画意識を持つことが、授業力を高めようとする意識にもつな

がると考えたからです。

もう一つは、奈良県教育委員会の事業である国立や私立校との人事交流です。08年度は奈良女子大学附属中等教育学校と、09年度は東大寺学園高校と、互いに教師を1人ずつ派遣し合い、教鞭を執ってもらいました。国立や私立校ならではのノウハウを吸収してきたことで、学校全体に良い刺激をもたらししています。

河原 本校の生徒の中で自己実現を果たし、希望校へ進学して行った生徒には三つの共通した特徴があります。その一つは、部活動に力を入れていることです。二つめは塾へは行っていないということ。特に、1、2年生の時はほとんど行っていないです。そして三つめは、親が自分のやりたいことをやらせてくれたと言います。

部活動は、創意工夫を学ぶ場です。課題研究に匹敵する学びを提供してくれます。学園祭などの自主活動



もそうですが、生徒はこれらの取り組みを通して問題解決能力と共同できる力を身に付けます。塾も有効に働く場面はあると思いますが、どうしても受け身の学習になり、また先生や仲間との交流を通して学ぶという観点はやや希薄になると考えま

す。孤立した学習に陥るかもしれません。学習は意欲を持って取り組まなければなりません。また「受験は団体戦」と生徒は言います。学習においても主体性と社会性を育てることが大切であると考えます。生徒たちの親が彼らにやりたいことをやらせているのも、学習や部活動、自主活動などに意欲的に取り組むことが、学びにとって最も大切だということを知っているからだと思います。

中杉 先生方の努力にばかり頼ってはいられません。管理職として、教師が働きやすい環境を整えるべきです。その意味でも、協働できる組織を管理職がつくり上げることは、大事だと思えます。勤務条件を整備し、教師に対する制度的な支援も充実させる必要があると思います。そのためには、教育委員会との連携が不可欠です。学校が小さな枠にとらわれず、複眼的な視点をもって共に競い合い、共に成長する時代でなくてはならないと思います。

その意味で、今後もこの「連絡会」を通してお互いの先進的な取り組みを吸収し合い、学校の力を高めていければうれしく思います。